無　題

山城21回　正　善　哲　士

馬代通りで山城高校時代の友達とばったり出会った。「新校舎になったの知ってる？ S館やN館が壊されていくのを毎日見ていて、涙が出てきたわ！」と聞かされた。思わず心の中でウーンと唸ってしまった。目を閉じ、形が無くなったと思うと哀愁が一層増してきて、在校時から今日までの光景が光速の速さで脳裏をかすめていく。

卒業時に気の合った仲間と毎年二回会う約束をし、会の名前を「山城会」と名付けて今日まで三十六年続いている。十年程前、この仲間の一人が福井へ転勤することになった。転勤間際に壮行会を設け、いつも彼を支えてくれている奥方を招待した。席上、奥方に山城会への理解と感謝の気持ちから、山城の校章を贈呈した。当時、一ヶ百五十円ではあったが、我々全員の気持ちをこの校章に託し、「彼女も山城会の一員です。」と言葉を結んだ。

近頃、涙もろくなって、感激すると涙腺が刺激される。これは、包み隠しようのない丸裸な心の感性がそうさせるのか・・・。山城高校＝山城会という言葉の響きに、同じ感覚を覚える。そこには、素の自分が確かに存在している。素の心で考えてみると、「正義、真実、責任の我等山城」と校歌に賛美されているが、この精神の大切さと実行の尊さを、在校時代に知らず知らずの内に、多くの仲間と培うことができたのかも知れないと思える。

目を開けると友達はニッコリ笑っていた。視線を少し先に向けるとそこには、新校舎の山城高校が陽の光を浴びて建っていた。もう一度、目を閉じると旧校舎の山城が鮮やかに瞼に映った。友達に言った。「記憶の山城は消えへんよなぁー。」「そーや。そーや。」

山城２回　森貞男